

周辺の
みどころ

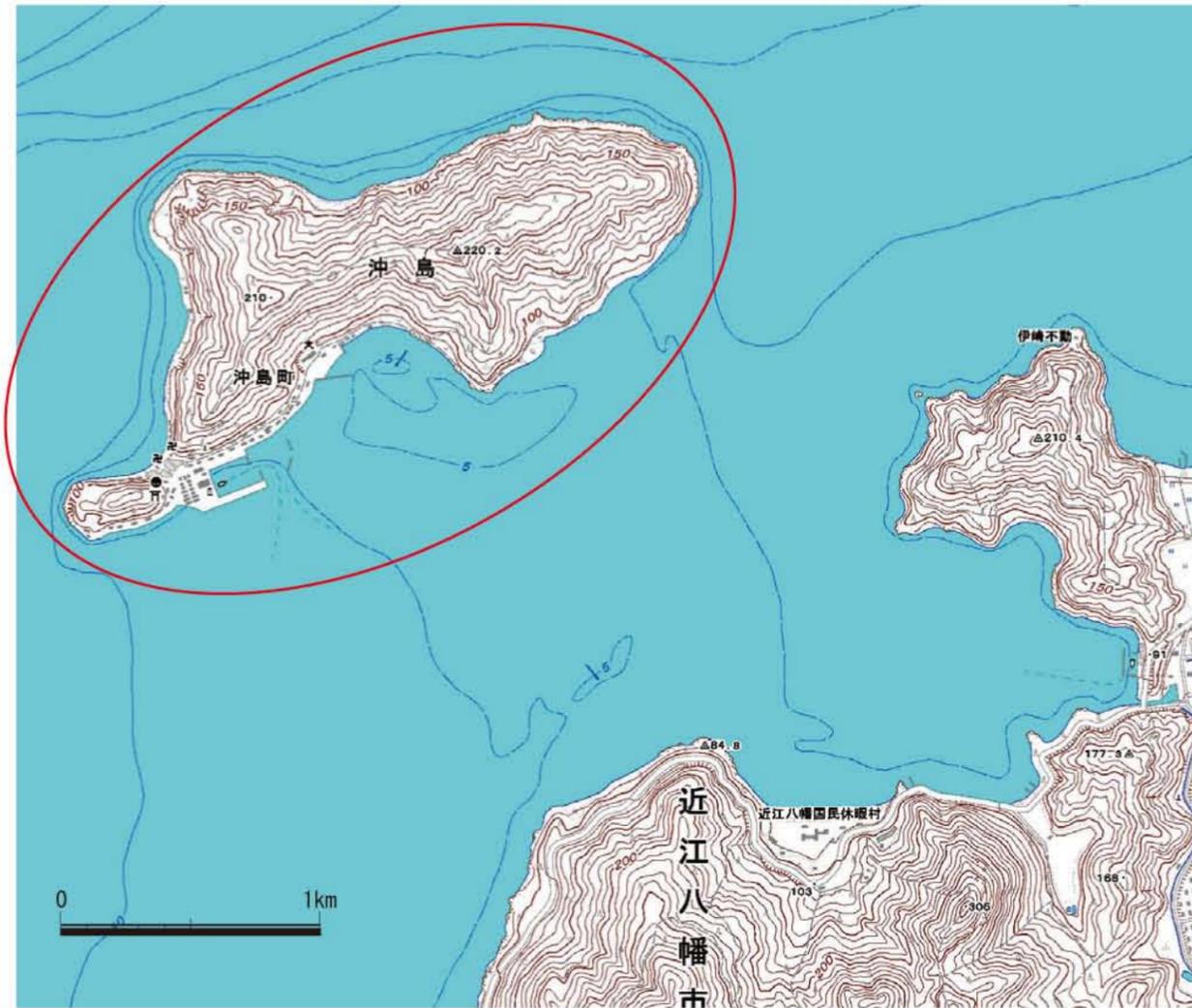
沖島の対岸にある伊崎寺では、毎年8月1日に「伊崎の竿飛び」が行われる。

長さ約13mの太い角材が、水平に琵琶湖に突き出ている、そこから7m下の湖面に飛び降りるものである。

この竿飛び行事は、今から約1100年前にこの寺で修行中の僧が、寺の眼下に広がる琵琶湖に空鉢を投げて、湖上を行きかう漁民たちに喜捨を乞い、そのあと自ら湖中に飛びこんで鉢を拾いあげた、という故事に基づくと言われている。



伊崎寺本堂



[アクセス]

- JR近江八幡駅から近江鉄道バスに乗り、「堀切港」下車後、船で沖島へ

[もっと詳しく知りたいひとへの案内]
(関連文献/関連施設)

- 近江八幡市教育委員会 Tel. 0748-42-6761
- 沖島漁協 Tel. 0748-42-3000

沖島の生業と食文化

近江八幡市沖島町



沖島漁港に集う漁船

沖島は琵琶湖最大の島である。

近江八幡市の沖合約1.5kmに浮かび、架橋はない。周囲6.8km、面積約1.53km²に約140戸、約400人が暮らしている。

淡水湖上の島としては、日本国内では唯一、人が定住することで知られる。

島の大部分は山地が湖岸に迫る地形で、西南部の狭小な平地に人家が軒を接して密集し、その間を軒下道がつづくという独特の集落景観を形成している。生業は漁業を主とし、かたわらに農業を営むほか、ふるくは石材業がさかんであった。

琵琶湖と深く関わる暮らしそのものが水の宝である。





沖島全景 (びわこビジターズビューロー提供)

沖島の生業と食文化

所在地 近江八幡市沖島町

沖島の黎明

沖島の歴史はふるい。大正年間には、近辺の湖底から縄文土器や土師器、和銅開珎、万年通宝、神功開宝などが採集されている。そして伝説によれば、島民は源氏の落人の子孫といい、平安時代中期の鎮守府將軍源満仲の残党である7人の侍が、沖島の人々の祖先と伝える。ただし、史料への登場は戦国期以降のことで、永正3年(1506)には沖島に關所が設置され、廻船警護料が徴収されていた。沖島は湖上交通の拠点として機能したから、戦国大名である六角氏や浅井氏の動員要請に応じて、沖島の船が物資の輸送にあっていた。こうした状況は織田信長政権下においても継承され、沖島周辺域の警護を命じられるとともに、元龜3年(1572)の浅井攻めにあたっては織田軍に沖島の船が加わったことが知られている。



棧橋 (びわこビジターズビューロー提供)

永代湖上借区

昭和26年以前、沖島周辺には沖島漁師の専用漁場があった。この水域は天正元年(1573)と推定される文書によって、織田信長の家臣浅尾弥兵衛が沖島に警護を命じた範囲とほぼ一致する。沖島は軍事や輸送にかかる動員に応じ、この水域の警護を負担することで、漁業権を認められていたことがうかがえる。そして、こうした排他的な漁業権はながらく慣行的に維持されていたらしいが、安永9年(1780)の漁場争論において幕府公認となり、さらに明治8年には滋賀県知事から永代湖上借区として沖島漁師のみが漁を営むことを許可されている。



漁を終えて



漁港からみた家並み



沖島の食
(上：鮎山椒入り若煮 下：えび豆若煮)

生業と食文化

沖島の漁の特徴は「待ちの漁法」といわれる。魚を追うのではなく、待つ漁という。代表的な漁法は沖すくい網、エリ、ヤナ、四手網、刺網(小糸網)、タツベ、モンドリなどで、アユ、コイ、ハス、ビワマス、フナ、イサザ、ウロリ、ウナギ、エビ、ダブ貝、シジミなどを獲る。これらは食用鮮魚や養殖用魚として出荷されるほか、アユの山椒入り若煮、エビ豆若煮、ハス田楽、フナズシ、ハスのメズシなどの伝統的な湖魚料理として食される。

なお、不漁時の対策もあって、島内では急傾斜地に田畑(やまだ、千円畑)を開墾してきたが、明治時代以降は島外で農地をもつようになった。漁船に農具を積んで出作りに向かう姿は、沖島独特の風景である。

沖島と石

「漁人多く此処に住み、其の島の石を取って之を売る」。享保19年(1734)に成立した『近江輿地誌略』は沖島についてこのように記している。そして明治20年代以降、琵琶湖疏水、南郷洗堰、鉄道東海道線の建設などの大型土木工事が滋賀県内で相次ぎ、沖島の石材業は大いに活況を呈することとなった。沖島産の石材は良質で、しかも丁場が湖岸にあったので、石材をすぐに船に積み込んで運搬できたためである。島外の農地も、この石材業による収入で得たところが大きい。コンクリートやトラックが普及する昭和30年代まで機能した、島内各地の丁場跡がかつての繁栄を物語る。